

論文番号	5 (第 11 回研究会 2013.11.23 於 恵泉女学園大学)
タイトル	「あれら」の人称指示から事物指示への転換について
著者名(所属)	竹内直也 (恵泉女学園大学 非常勤講師)
連絡先 Eメール	take1234@basil.ocn.ne.jp
<p><b>論文内容</b></p> <p>指示語複数形「これら・それら・あれら」は一連の研究により、文脈指示で複数の事物の個別性に注目する時に用いられる点はずでに指摘されている。しかし文脈指示である点、談話管理理論(金水・田窪(1996))からみるとD一領域内を指示対象とするものを個別に複数指示するという複雑なプロセスが行われているとは考えにくい点から、「あれら」の使用は極めて不自然なものである。元来「あれら」は人称詞であったが、翻訳語として用いられることで事物を指し示すようになったことは多く論じられているが、人称指示の消失および事物指示の発生および成立時期まで言及したものは管見の限りない。本発表では「青空文庫」など明治期から戦前期までのデータ、および「少納言」など現代語のデータを検証し、人称指示から事物指示への転換点が昭和初期であると仮定し、現在用いられる「あれら」は翻訳調のやや不自然な用法のみが残ったことを検証する。</p> <p>青空文庫の例を検討すると、人称指示と事物指示の用法、両者が見られる。さらに人称指示の場合、「彼等」などの字をあてて「あれら」と読ませるものもある(1)。さらに事物指示用法を検討すると、翻訳文、論理的文章内に現れる例が多く、論理的な書きことばとしての性質を有していると考えられる。しかしその用例は堅苦しくやや翻訳調で、“these”の訳語として発生し、それを翻訳した形であると考えられる(2・3)。</p> <p>(1) 今のこのひどい中で二人の口が減ることだけさえ一方ならないことなのに、その上いくらかは入っても来ようというものだ。</p> <p>彼女等(あれら)だってまんざらの子供ではなし……(宮本百合子「禰宜様宮田」)</p> <p>(2) ある西洋人の地図にはこのヤムド・ツォ湖の水が直ちに北に流れてブラプトラ川に入るところを書いてあったのを見ましたが、あれらは全くの間違いであるのです。(河口慧海「チベット旅行記」)</p> <p>(3) 「あれは、ほんの夢なのですわ。」と、からすがいいました。「あれらは、それぞれのご主人たちのところを、りょうにさそいだそうとしてくるのです。」(アンデルセン 楠山正雄訳「雪の女王」)</p> <p>このように大正期から昭和初期には両用法が用いられるが、戦後の用例を「少納言」で検索すると、たしかに両用法あることはあるが、(4)のような人称の使用は減少し、翻訳調のようなやや不自然な「あれら」の使用が目立つ(5・6)。ここが、「あれら」の人称指示から事物指示への転換点と考えられる。</p> <p>(4) 「(どうだ、おまえも入院しないか?) なんて、あたしに言うの!」「あれらは、丈夫だけがとりえの、あほうじゃから」(今村葦子「良夫とかな子」)</p> <p>(5) ヒノキでも直径二尺以上のものはザラにありましたし、三尺のもあったでしょうな。あれらは江戸時代に植えたもんじゃろね。(山村基毅「森の仕事と木遣り唄」)</p> <p>(6) 「鯨と象の頭蓋骨は地下の倉庫に置いてあるですよ。御存じのように、あれらはかなりの場所をとりますからな」と老人は言った。(村上春樹『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』)</p> <p>以上から、人称から事物指示への転換点は昭和前期であると仮定する。人称指示用法は「彼ら・彼女ら」など「人称+複数接尾辞」が有することとなり、「あれら」は「あれ+ら」と解釈され、事物指示の複数形と解釈されるようになったのである。</p> <p>しかし事物指示の成立はあくまで翻訳語からであるため、現在においても決して自然な例と言えないものが多くある。国広(1997)は「あれら」について「国語辞典に載せるべきである」と述べているが、少なくとも現代日本語では「あれら」は特殊な語であると言わざるを得ないだろう。</p>	
<p><b>参考文献</b></p> <p>庵功雄・三枝令子(2013)『日本語文法演習 まとまりを作る表現』スリーエーネットワーク</p> <p>金水敏・田窪行則(1996)「複数の心的領域による談話管理」</p> <p>国広哲弥(1997)『理想の国語辞典』大修館書店</p> <p>竹内直也(2004)「これら・それら・あれら—指示詞複数形の「指示」について—」(『学習院大学人文科学論集』13号 pp.69~89)</p>	